プログラム・ノート

越懸澤麻衣

ドビュッシー：『神聖な舞曲と世俗的な舞曲』

ハープと弦楽のためのこの作品は、1904年にクロード・ドビュッシー（1862～1918）がプレイエル社の社長ギュスターヴ・リヨンからの依頼で作曲したものである。プレイエル社といえばピアノのイメージが強いが、ハープも製造しており、当時フランスで最も普及していた7本のペダルを備える「ダイアトニック・ハープ」（エラール社製）に対抗すべく、1894年に「クロマティック・ハープ」という半音階を演奏しやすくしたハープを考案した。その普及のため、リヨンは有名な作曲家にこの新しい楽器でなければ演奏できない作品を求めたのである（結局、このハープはほとんど広まらなかったけれども）。

作品は緩・急の2つの部分から構成され、作品全体を通して平行和音や教会旋法風の旋律など、ドビュッシーらしい響きが中心をなす。前半の「神聖な舞曲」は、穏やかで優雅なサラバンドのような音楽。最後はD（レ）－A（ラ）を核として消えるように終わると、その音型をバス音として「世俗的な舞曲」が始まる。このワルツは、現世の愛の世界を表現しているかのようである。

コーエン：『蛍の哀歌』

ギラッド・コーエン（1980～ ）は、クラシック音楽だけでなくロックや劇音楽などさまざまな分野で活躍しているイスラエル出身の作曲家である。彼は2017年にイスラエル・チェンバー・プロジェクトからの委嘱を受けてこの曲を書いた。クラリネット、ハープ、弦楽トリオという編成である。

作曲者自身の解説によると、この曲の主題は12音からなり、その旋律が曲のなかでさまざまに変容し、蛍の短い寿命の間に起こるメタモルフォーゼ（変化）を反映している。曲全体は4つの部分で構成され、それぞれが蛍の4つのライフステージを表現する。一瞬きらめくような短いファンファーレに続く冒頭部分は、蛍の卵の段階。穏やかだが、次へのエネルギーも内包している。続く軽快な部分は、時に攻撃的にもなる。弦楽器の持続音が印象的な第3部では、サナギの段階を経て冬眠している蛍の様子が描かれる。その後、閃光のように新しいフレーズが上行音階で始まり、ハープが反復音を奏でる。まるで、熱帯の蛍の群れが一斉に光り出すかのように。そして、成虫となった蛍がその生涯を振り返る哀歌で閉じられる。

カプレ：『幻想的な物語』

この作品も、プレイエル社のリヨンからの委嘱で書かれたものである。まずは1908年にクロマティック・ハープとオーケストラのための『伝説』という題で発表され、それを1922～23年に(エラール社の)ダイアトニック・ハープと弦楽四重奏の編成に作曲者自身が改訂した。作曲者のアンドレ・カプレ(1878～1925)は今日ではあまり知られていないが、フランス人作曲家の登竜門であるローマ賞を受賞するなどフランスで活躍した人物で、ドビュッシーとも親交があった。

「ポーの『赤死病の仮面』による」という副題が付けられているように、この曲はエドガー・アラン・ポーの短編小説を題材としている。ペストが国を覆うなか、舞踏会に集う死すべき運命にある人々――日本でもコロナ禍で注目を集めた物語である。ポーが描く陰鬱で奇妙な雰囲気を、カプレはハープで劇的に表現した。ハープが美しく優雅なイメージをまとっていた当時としては異例の用法である。それは彼がこの作品の他にもハープを用いる作品を多く作曲し、楽器の特色やさまざまな技巧を熟知していたからこそであろう。

ベートーヴェン(シャピロ 編曲)：
交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」(室内アンサンブル用編曲)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の交響曲第3番「英雄」は、交響曲の歴史に革新をもたらした作品である。1803～04年、いわゆる「傑作の森」の時期に書かれた。

今回は、イスラエル・チェンバー・プロジェクトが委嘱したフルート、クラリネット、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、ピアノのための編曲でお聴きいただく。編曲者のユヴァル・シャピロはテルアビブ出身の音楽家で、現在イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団のトランペット奏者を務めている。交響曲の編曲はベートーヴェンの時代からごく普通に行われていたことで、1806年の初版の翌年にはすでに、ピアノ連弾の他、ピアノ四重奏、七重奏版が出版され、その後も続々と編曲楽譜が出版された。録音媒体のない時代、音楽は聴くというより自分たちで演奏して楽しむという意味合いが強かった。人気のあるオーケストラ作品を家庭で演奏できるようにした編曲には、需要があったのだ。この編曲は比較的編成が大きいため、オーケストラ顔負けの音の厚みと同時に、室内楽らしい密なアンサンブルも聴かれる。単に足りない音をピアノでカバーするのではなく、このメンバーでの室内楽として、メリハリのある編曲となっている。

(こしかけざわ まい・音楽学)